



オトナの部活動のススメ

会員 大野 瑛 (64期)

みなさんは学生時代に部活動をしていただろうか。少し思い出してほしい。

私にとって、部活動に打ち込んでいたあの青春時代の時間は人生の一番の宝物の一つである。私は中高大とテニスをしていたが、私の中の部活動の記憶は、部活仲間と共に真夏に真っ黒になりながら必死に黄色いボールを追いかけて、同じ釜の飯（ファミレスやマックがほとんどだったが）を食い、たわいのない話をする。決して強豪校というわけでもなくいつも上位まであと一歩だったが、あの時はただただ部活動が楽しく、勉強もそっちのけで部活動に没頭していた。その記憶は10年以上の時を経て美化され、キラキラした記憶に補正がされているのかもしれないが、人生の宝物であることに間違いない。思い出は、大人になると宝箱にしまわれ、同窓会があれば時々取り出されて「あの頃は楽しかったなあ」と昔話に花を咲かせるものだ。

しかし、私にとって部活動は学生のみに許されたキラキラした時間…では決してない。今現在がまさに部活動の現役真っ盛りである。ラケットがランニングシューズに替わり、黄色いボールはマラソンのタイムになったが、今も何かを必死に追いかけている途中だ。

そう。オトナになっても「部活動」はできる。あの時間は、いつだって目の前に作り出せるのだ。

きっかけは司法試験の勉強中の運動不足とストレスを解消するために始めたジョギングだった。弁護士になった後もその習慣は途絶えることなく、コツコツ続けていくうちに、走ることで面白くなっていった。ランニングの時間捻出のため、仕事や日常生活で色々な工夫をするようになった。

今ではフルマラソンのタイムは2時間50分を切り、次は2時間40分を切ることを目標。身体能力は学生の時がピークだと思っていたが、走ることに限っては、

今の自分（33歳）が18歳の自分を優に超えていることは間違いない。ただ、ランニングを続けられた一番の理由は、「仲間」の存在だった。

仕事仲間や昔の同級生とも違う、同じ趣味を共有し何かに打ち込む仲間。共に練習し、共に食事し、たわいのない話をする…大人になってから出会ったけれど、これはまさにあの記憶の中の「部活仲間」と同じ。

写真は「いわて銀河100km駅伝」という岩手県北上市から盛岡市ま

での山あり谷ありの100kmを仲間とタスキをつなぎ走る大会の1シーンである。今回の大会に参加した部活仲間は司法書士、中小企業診断士、弁護士のメンバー（もは



前列左端が筆者

や仕事と部活がごっちゃになっているが）。大会では、大学生チームも自衛隊チームも撃破し、混合の部で優勝して、大の大人が大喜びの大騒ぎだった。青春真っ盛りである。

今の私たちには本業の弁護士業があり、家族としての責務だってあるかもしれない。ただ、部活動の時間は工夫次第で必ず作ることができる。自分が好きな何かに没頭し努力していると、次第に仲間が集まってくる。運動部でも文化部でもはたまた帰宅部での趣味の活動でも何だって部活動である。すでに部活動をしているみなさんもたくさんいるかもしれないが、もし部活動は過去のものと思っている方がいらしたら是非あの時間をもう一度経験してほしい。